令和３年（2021年）９月24日
東京都教育庁地域教育支援部管理課

第130号

東京の文化財

上空からの現在の国立代々木競技場
（提供：（独）日本スポーツ振興センター）

目 次

国立代々木競技場～新たな重要文化財～ ---------- 1~3
文化財を活かす（北区・東大和市） ---------- 4~5
特別展　縄文2021－東京に生きた縄文人－ ---------- 6

国立代々木競技場～新たな重要文化財～

名前は「国立代々木競技場」

「国立代々木競技場」（以下、代々木競技場）は、昭和 39（1964）年の東京オリンピックのために建設され、再び東京でオリンピックが開催された今年、国の重要文化財に指定されました。そんな、東京オリンピックの申し子とも言えるこの代々木競技場は、色々な名称を持った施設です。当初は「国立屋内総合競技場」、そして建築用地の地名をとっての「ワシントンハイツ屋内総合競技場」、「国立代々木競技場」のほか、「代々木オリンピックプール」「代々木競技場」「代々木第一体育館」「代々木第二体育館」等々・・・。

なかでも「屋内総合競技場」の名称は、日本が戦前戦後を通じ「水泳ニッポン」というように水泳競技に対して国民の関心が高く、また好成績が期待されていたこと、東京オリンピックで悲願の公式種目になり、やはりメダル独占を狙っていた柔道も行えるような施設を目標としていたことに起因しています。

現在の国立代々木競技場第一体育館（提供：（独）日本スポーツ振興センター）

現在の国立代々木競技場第二体育館（提供：（独）日本スポーツ振興センター）

日本を代表する建造物の誕生

昭和34(1959)年の東京オリンピック招致決定から約２年にわたるアメリカとの交渉の末、広大で利便性のある土地として、現在の代々木公園、青少年センター等の施設のある「ワシントンハイツ」に選手村と代々木競技場が建設されることが決定されました。

そして、代々木競技場は、「建設・総合意匠」丹下健三、「構造」坪井善勝、「設備」井上宇市の日本建築界を代表する３氏によって設計され、オリンピックまであと20か月と迫った昭和38(1963)年3月に建設工事が始まりました。誰もが経験したことのない数多くの問題を解消するため、先の３氏を中心に実験・研究・確認を繰り返しながらあらゆる新鋭機器を動員した、建築界の全知能を傾けての工事となりました。ついに、残すところ39日という綱渡り的な工事で起工から18か月、当時では世界に類のない高張力による「吊り屋根方式」で、明治神宮の森の美しい環境を生かした高い芸術性を保つ、日本を代表する建造物が誕生したのです。

建設中の国立代々木競技場とワシントンハイツ（提供:(独)日本スポーツ振興センター）

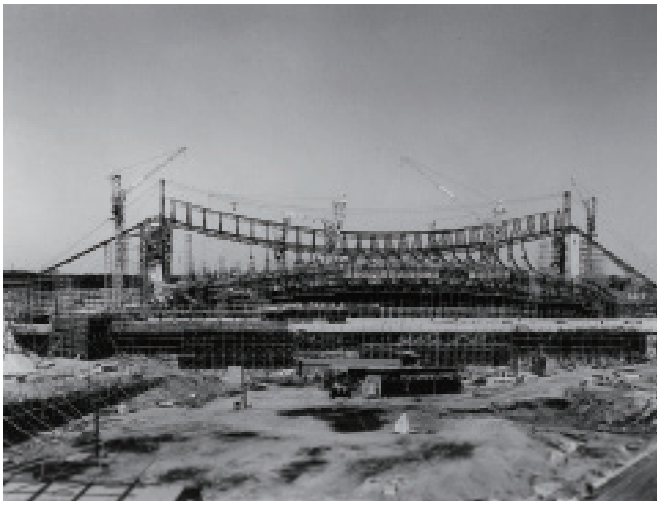
屋根は「吊り橋」？

建設当時、世界でもまだ例の少なかった「吊り屋根方式」を用いて建設された代々木競技場は、一体的な大空間を観客と競技者とが共有でき、１万５千人の観客の流動が機能的にも心理的にも円滑に行われる空間となりました。設計者の丹下健三が探求し、行き着いた方式です。

第一体育館の吊り屋根は、大きな２本の支柱の間に渡された全長280メートルのメインケーブル２本が支えています。さらに両端は地中へと伸び、屋根を引っ張り上げ、そのメインケーブルに梁を渡して鋼板を張っています。このメインケーブルは、いくつものワイヤーロープの集合体で、アンカーブロック(巨大なコンクリートの塊)で支えられており、このケーブルを土とアンカーブロックの重量で抑え込んでいます。

第二体育館も、１本の支柱から螺旋状形に吊りパイプが架けられ、屋根面が吊り渡されています。

そして吊り材には、あらかじめ成型した鉄骨を使用し、当時の吊り構造の技術では成し得なかった屋根曲線を作り出しました。こうして出来上がった第一体育館の屋根は、まるで瓦屋根の大棟と鴟尾のようであり、スタンド外壁の格子を思わせるデザインなど、日本の造形美を表現した建築として、国内外から高い評価を得ることになります。



建設中の国立代々木競技場第一体育館（提供:清水建設株式会社）

建設中の国立代々木競技場第二体育館（提供:株式会社大林組）

1964年東京オリンピックから市民スポーツの普及へ

昭和39(1964)年10月、東京オリンピックが華やかに開幕し、第一体育館では水泳競技、第二体育館ではバスケットボール競技が行われました。

東京オリンピック後は、第一体育館においては、夏はプール、冬はアイススケート場としての設備機能を持たせ、昭和39年12月25日アイススケート場が一般公開されると、開場５年目の昭和43(1968)年に100万人、その翌年には200万人、10周年の昭和49(1974)年には300万人目の入場者がありました。

オリンピックの翌年の夏には「こどもプール」が公開になり、その翌年には各種スポーツ教室が開かれるなど、スポーツの底辺拡大のため、市民スポーツの場としてのスポーツ振興策が実施されてきました。

完成後の国立代々木競技場第一体育館
(手前:飛込プールと飛込台、奥:競泳が行われた50mの競泳プール)
(提供:(独)日本スポーツ振興センター)

様々な顔を持つ施設として

スポーツ競技においても、「世界フィギュア選手権大会」や「アイスホッケー世界選手権大会」などスケートの国際大会利用が増え、昭和52(1977)年11月にはアイススケート場(氷)の上に床を仮設しての「第２回バレーボールワールドカップ'77大会」が開催されました。翌年５月には「国際ロータリー年次大会」が、プールからフロアーに転換して実施されました。このフロアーとしての活用は、建設当初の基本計画から指向されており、完成から13年の歳月を経て、多目的競技施設としての有効利用が可能になりました。

その後も、昭和58(1983)年には第一体育館で初めてのコンサートが行われ、「文化施設」としての顔、また、昭和60(1985)年には「第16回全国高等学校バレーボール選抜優勝大会」が開催され、「高校バレー」のメッカとしての顔も持つようになります。

スケートリンクとしてにぎわう、冬の国立代々木競技場第一体育館
(提供:(独)日本スポーツ振興センター)

この様に、本来のプールとしてだけではなく、アイススケート場、体育館、コンサート会場、オペラ・ミュージカル会場という色々な顔を作り出すとともに、渋谷の街同様、時代の要請に応えながら幅広く利用されてきました。これからも、多くの方々に利用して頂ける、親しめる施設として、我が国のスポーツ・文化の歴史を刻み続けることが期待されます。

コンサート会場としての設営がされた、国立代々木競技場第一体育館
(提供:(独)日本スポーツ振興センター)

国立代々木競技場第一体育館では、高校生の大会もワールドカップも行われます。(全国高等学校バレーボール選抜優勝大会2009より)
(提供:(独)日本スポーツ振興センター)

国立代々木競技場第二体育館は、1964年のオリンピックではバスケットボールの会場となり、バスケットボールの聖地と言われています。(キリンワールドバスケットボール'80より) (提供:(独)日本スポーツ振興センター)

中里貝塚

国指定史跡中里貝塚の保存と活用

他に例を見ない貝塚

中里貝塚は、縄文時代中期から後期にかけての約800年間に、当時の海浜部に形成された大型の貝塚です。その規模は幅100ｍ、長さ700ｍにも及び、貝塚の中心部の厚さは２～4.5ｍもあります。これだけの規模の貝塚は他に例を見ません。普通の貝塚と異なる点はその立地や大きさだけでなく、貝層の内容にも見られます。中里貝塚からは土器や石器がほとんど出土しません。また、魚骨や獣骨も混在していません。貝塚を構成する貝の種類もマガキとハマグリの２種類に限定され、しかも大型なものが目立ちます。どうも種類と大きさを選択して採取していたようなのです。

縄文時代の“水産加工場”

さらに、中里貝塚の性格を決定づける遺構が貝層のすぐそばから発見されました。焼けた石とカキ殻が残る土坑が見つかったのです。地面を浅く掘りくぼめた中にカキと焼いた石を入れ、海水を撒いて草木で覆ってふたをすれば蒸し焼きになります。このような方法で一度にたくさんのカキの口を開け、中身を取り出したと思われます。取り出された中身は、日持ちを良くするため天日干しで干し貝にされた後、遠くのムラまで運ばれていったと考えられています。残された貝殻は廃棄され、この繰り返しで貝塚が形成されました。現代風に言えば、中里貝塚は縄文時代の“水産加工場”だったのです。

貝を蒸す土坑

国の史跡に指定

平成８(1996)年の発掘調査において上記のような特徴が判明した中里貝塚は、縄文時代の生産や社会的分業、社会の仕組みを考えるうえで重要な遺跡として平成12(2000)年に国史跡に指定されました。その後、平成24(2012)年に史跡指定地の隣接地において追加指定を行い、遺跡の保護が図られました。

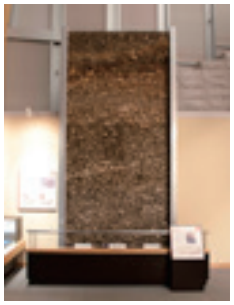
中里貝塚の整備と活用

中里貝塚の歴史的価値を高めて適切に保存・継承し、史跡を活かしたまちづくりを推進していくために、令和２(2020)年に『史跡中里貝塚保存活用計画』が策定されました。そして、令和３(2021)年3月には、「マチナカで出会う縄文文化－史跡が拓く新たな未来－」をテーマに、より具体的な整備方針を定めた『史跡中里貝塚整備基本計画』が策定されました。

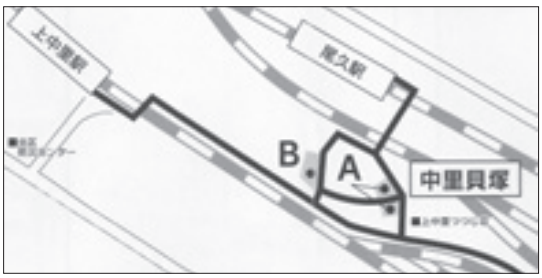
中里貝塚史跡広場

中里貝塚のこれから

整備基本計画では、貝塚の平面剥ぎ取り標本や貝層をイメージした断面サイン、復元模型などで地下遺構を表現するほか、ＡＲ・ＶＲなどのデジタル機器を用いて地下に埋蔵されている貝塚の可視化を目指すとしています。また、貝塚全体の広がりをイメージしやすいような工夫を講じることも盛り込まれています。令和４(2022)年以降、この計画に基づき、市街地に残された史跡として、地域の人々が集い、学び、ふれあう場となるよう、中里貝塚の整備・活用が進められていきます。



貝層剥ぎ取り標本
（北区飛鳥山博物館）



史跡指定地「A 上中里２丁目広場・B 中里貝塚史跡広場」

所 在 地：A北区上中里2丁目2番・4番　B北区上中里2丁目8番・9番
開場時間：8：30～17：00
アクセス：JR東北本線「尾久」駅より徒歩５分、JR京浜東北線「上中里」駅より徒歩10分

北区飛鳥山博物館「貝層剥ぎ取り標本」

所 在 地：北区王子１－１－３飛鳥山公園内
開場時間：10：00～17：00（観覧券発行16：30まで）
アクセス：JR京浜東北線「王子」駅南口より徒歩５分、地下鉄南北線「西ヶ原」駅より徒歩７分、都電荒川線「飛鳥山」停留場より徒歩４分

版築―突き固めた土が何層も見える―

まちの歴史を語る資料
―村山貯水池で古レール発見―

村山貯水池とは

1927年に竣工した村山貯水池は、水の需要が増え続ける東京市に水を供給するために、狭山丘陵の谷あいに、造られた貯水池です。周囲の管理地を含む村山貯水池の面積は、東大和市域の約23%を占めています。貯水池の築造にあたっては、その谷あいに住んでいた人々のふるさとが水底に沈むという犠牲を伴いました。

レール発見の経緯

首都直下地震を想定した村山上貯水池堤体の耐震診断を、2012年に行いました。その結果、盛土による堤体強化工事を行うこととなり、現在は、工事の中心となる堤体への盛土が行われています。

堤体強化工事の様子

そのような中、工事担当者から博物館にレールが持ち込まれました。お話を伺うと、コンクリート製の法留擁壁（のりどめようへき）に、鉄筋のかわりに補強材として使われていたレールとのことでした。長い年月の間に、堆積した土砂で埋まってしまっていたそうです。

博物館では、さっそく現地へ向かい、現地の様子を写真におさめるとともに、膨大な量のレール、擁壁を作るときの型枠の残骸・カスガイ等の一部を採集してきました。

解体中の擁壁

レールについて

持ち帰ったレールは4種類あり、いずれも12ポンド（1mあたり約6kg）レールという規格でした。

①「1240 － ILLINOIS － USA － S － 1918」という刻印があり、アメリカのイリノイスチールというメーカーの製品で、1918年製と考えられます。東村山駅から工事材料を運ぶために造られた、18ポンドレールを使った軽便鉄道の開通が1920年なので、開通前後の時期に運び込まれたのかもしれません。

②「ET USA 1240」という刻印があり、エドガー・トムソンというメーカーか、「ET」の刻印を使い続けた同社の流れをくむメーカーの製品。

③刻印はなく、表面は腐食によるクレーター状の小さなへこみがたくさんみられる製品。

④刻印がなく、腐食もみられない製品。

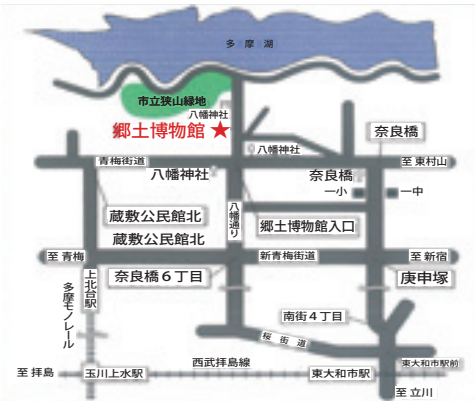
なぜ、これらのレールを鉄筋のかわりに使おうとしたのか、どのような経緯で資材として用意されたのか、残念ながら今のところわかっていません。

分別されたレール

レールの今後

東大和市は、この100年余りの間に村山貯水池築造と、軍需工場や社宅街の建設という、ふたつの大きな出来事によって、人々のくらしが大きく変わった経験を持つまちです。今回発見されたレールについては、まだ調査を必要としますし、レールだけで語れることには限りがありますが、工事にかかわった人の日記や、かつて聞き取りをした古老の話、工事の様子を撮影した写真などとともに、東大和市の歴史を語り継ぐ資料として活用されていきます。

現在、東大和市立郷土博物館では、発見されたレールと工事中の写真を展示しています。



東大和市立郷土博物館　☎042-567-4800　Fax：042-567-4166
所 在 地：〒207-0031 東大和市奈良橋1-260-2
アクセス：小西武拝島線東大和市駅より
イオンモール行（西武バス）で「八幡神社」下車徒歩2分
または青梅車庫行（都バス）「八幡神社前」下車徒歩2分
東村山駅西口行（西武バス）で「奈良橋」下車徒歩7分
多摩モノレール上北台駅より
ちょこバス外廻りで「郷土博物館入り口」下車徒歩2分
※ちょこバスは本数が少ないのでご注意ください。

特別展　縄文 2021－東京に生きた縄文人－

多摩ニュータウンNo.471
遺跡出土土偶

北海道・北東北の縄文遺跡群が世界文化遺産に登録され、最近、「縄文時代」があらためて注目を集めています。では、縄文時代に今の東京周辺で生活していた人々はどのような暮らしを送っていたのでしょうか。今年の10月９日(土)から12月５日(日)に江戸東京博物館(墨田区横網1-4-1)で開催予定の『特別展　縄文2021－東京に生きた縄文人－』では、まさにこの点に焦点をあて、以下のような展示で縄文時代の人々の暮らしぶりを再現します。

東京の遺跡発掘史

東京での遺跡発掘調査の歴史を振り返りつつ、著名な大森貝塚をはじめ、都内各地の遺跡を紹介します。「島嶼部」(大島村下高洞遺跡、利島村大石山遺跡など)、「沿岸部」(荒川区延命院貝塚、大田区雪ヶ谷貝塚など)、「台地部」(新宿区落合遺跡、町田市忠生遺跡など)、「山地部」(青梅市駒木野遺跡、奥多摩町下野原遺跡など)の４つのエリアに分けた遺跡の展示を通して、それぞれの土地における縄文人の生活ぶりを垣間見ることができます。

縄文時代の東京を考える
－東京とその周辺地域の輪郭－

「集落」「葬墓制」「石器」「土器」「木器」「骨角器」「モノ(土器、ヒスイ、石材)の動き」といった視点から、縄文時代の東京とその周辺地域の姿を描き出します。縄文時代最古級の遺跡であるあきる野市前田耕地遺跡出土の土器・石器をはじめ、都内の遺跡から出土した34点もの縄文土器の優品から「土器の機能と美の変化」に迫るコーナーや、富山、新潟、群馬、埼玉の各遺跡から出土した貴重な木製品もふまえつつ「木工・漆工の世界」を語るコーナーなどがあります。

前田耕地遺跡出土石器

多摩ニュータウンNo.67 遺跡出土土器

縄文人の暮らし

「海岸部の暮らし」では、北区西ヶ原遺跡群にスポットをあてました。ハマ貝塚(海に近い場所につくられた貝塚)として中里貝塚、ムラ貝塚(集落につくられた貝塚)として西ヶ原貝塚を紹介しつつ、中里貝塚の貝層剥ぎ取り資料・貝層断面写真、西ヶ原貝塚における土器や貝の捨て場の再現など、両遺跡に関わる原寸大の展示品を通して、遺構の質感及び当時の景観に迫ります。

「丘陵部の暮らし」では、多摩ニュータウンNo.107遺跡を素材として、環状集落を20分の1で再現しました。あわせて、縄文人の暮らしを彩る様々な遺物を展示します。特に多摩ニュータウンNo.72遺跡の住居跡から出土した大量の土器群は、我々に縄文人の豊かな生活の痕跡をまざまざと感じさせてくれるでしょう。

多摩ニュータウンNo.72 遺跡土器出土状況

今回の展示では、都内の国指定重要文化財から、大森貝塚出土品、前田耕地遺跡出土品に加え、青梅市寺改戸遺跡出土注口土器・小型深鉢形土器、調布市下布田遺跡出土耳飾り、東村山市下宅部遺跡出土漆塗り弓と杓子(柄部)を展示します。また、東京の縄文土偶が約100点、都内の遺跡から出土したヒスイ製の装身具が約50点の他、多摩ニュータウンNo.72遺跡から出土した国内最小級の土偶頭部が展示されるのも大きな見所の一つです。

都内全体の縄文遺跡を対象とした特別展が開催されるのは昭和61(1986)年以来で、実に35年ぶりのことになります。時空を超えて集結した縄文の遺跡・遺物たちが、東京に生きた縄文人の暮らしぶりをどのように語ってくれるのか。是非、実感してみてください。

「東京文化財ウィーク 2021」について

新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況を考慮し、本年度の開催については検討中です(令和3年9月1日時点)。
最新情報は下記ホームページをご確認ください。
https://www.syougai.metro.tokyo.lg.jp/sesaku/week.html

令和３年９月24日
発行　東京都教育庁地域教育支援部管理課
〒163-8001　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話　03（5320)6862

東京都教育委員会印刷物登録　令和３年度第36号

R60 古紙パルプ配合率60%再生紙を使用
VEGETABLE OIL INK
リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。